



アイコ美術工藝社  
相子 恭平さん・靖子さん (岩井)

### 自然豊かで人も優しい 中野は創作に向いている

東京藝術大学大学院を修了後、生活・制作の拠点を探していた相子さん夫婦。知り合いがいた縁で、もとは飯山市を候補にしていました。が、さまざまな方に移住先を紹介してもらった中で、中野市の勝山建設さんに作業場の一部を貸してもらえることになり、2015年5月に東京から拠点を移しました。その後、空き家バンクで物件を見つけ、一年後に岩井に転居。「アイコ美術工藝社」を立ち上げました。

「勝山さんとの出会いが無ければ今の私たちはありません。感謝の気持ちを持って制作活動に取り組んでいます」と彫刻家の恭平さんは話します。デザイナー・染色家の靖



子さんは「飯山駅まで車で約10分と、北陸新幹線を使えば東京へのアクセスも良く、仕事や展示会に出展したときも便利でした」とほほ笑みます。「田舎過ぎず、適度に栄えていて、買い物なども便利でちょうどいいです」と話す恭平さん。ご近所さんからおいしい野菜や果物をたくさんいただくという靖子さんは「自然が豊かで人も優しい中野は創作に向いています」と話します。

「『たかやしろ見晴らし街道』からは、ぶどうやりんごの畑越しに中野市街地が一望でき、春は桜もきれいで気に入っています」という相子さん夫婦。特産の農産物をモチーフにした手拭いを作った靖子さんは「地元の素材や環境を生かし、地域に根差したものがづくりを目指しています」と思いを巡らせています。

### 1日に1回は「いいところ だなあ」と思うんです

兵庫県伊丹市から2015年8月中野市へ移住し、本市初の『地域おこし協力隊』として活動している内山奈月さん。大阪府の電子機器メーカーで忙しい会社員生活を送っていた内山さんは、幼いころに家族旅行でよく訪れた北信州で、いつか観光に携わる仕事がしたいと思っていました。そんなとき、ちょうど中野市で『地域おこし協力隊』の募集があり、「半ば勢いで移住しました」と内山さんは話します。

生活・活動の拠点は築80年の古民家を改修した『なんだ屋』。豊田特産振興会の皆さんが、農業体験や田舎暮らし体験ができる環境づくりをすすめる施設です。農業をやってみたいという人が『なんだ屋』で宿泊まりしながら農家さんの手伝いに行く『ボラバイト』の受け入れや、日曜日限定のそば屋兼ピザ屋の営業を内山さんもサポートしています。



地域おこし協力隊  
内山 奈月さん (毛野川)

また、内山さんのアイデアで、月に一度、特産品や郷土食を集まって食べる『ツキイチごはん会』も開催しています。内山さんは「なんだ屋を知ってもらい、人が集まることで、地域を知ってもらい、みんなが元気になるきっかけになればいいですね」と笑顔で話します。

豊田地区の米山から見える高社山や、近所の人とのふれあいを通して、移住から1年以上たった今でも、「1日に1回は『いいところだなあ』と思うんです」と内山さん。

直売イベントでお客さんと対面して農産物売る農家さんが、自分の農産物に自信と誇りを持ってキラキラしている姿に惹かれ、次第に農業の面白さと奥深さに魅了されていったという内山さん。「将来的には自分で作ったりんごをお客さんに届けたいです」と目を輝かせています。





信州中野つどい農園  
関良祐さん・理恵さん (金井)



季節を感じながら  
自然の中で働くことの幸せ

「農業を仕事にしたい」と東京での会社勤めから転身し、小諸市にある長野県農業大学校で1年、さらに中野市の果樹農家(里親農家)の元での1年の研修を経て、2016年4月から中野市で本格的にぶどう栽培に取り組み始めた関さん夫婦。二人にとって、長野県は何回も旅行に来ていて愛着があったことに加え、新規就農者の支援体制が充実していました。農業の中でも特に果樹がやりたかったという良祐さんは、「東京のスーパーで中野市産のぶどうをよく見かけていて、『果樹とい

えば中野』というイメージが強かったです。希望していた中野市の里親農家さんに受け入れてもらえたこともあり、中野市に移住して就農することを決めました」と話します。

里親農家さんの親戚の家を間借りしてスタートした中野市での生活は、自然の豊かさや人の優しさなど、驚きと感動にあふれていたという関さん夫婦。「春には花が咲き、夏は緑が濃くなり、秋には葉が紅く色づき、冬は真つ白な雪に包まれ、四季の移り変わりがこんなにはつきり感じられるのは、今までにない経験でした」と理恵さんは笑顔で話します。「近所の方も私たちを気に掛けてくれて、野菜を届けてくれたり、畑



の心配もしてくださいます。中野市は畑も山もたくさんある一方、市街地に出ればスーパーもたくさんあり、住みやすい『ほどよい田舎』だと思います」と話す良祐さん。

近所の方から園地の一部を借りることができた関さん夫婦は「自分たちが作ったものを食べてくれた人が『おいしい』と言ってくれること、そして自然の中で季節を感じながら夫婦二人揃って仕事をできることが本当に幸せです」と話します。雄大な高社山の麓の畑で農作業をして、北信五岳の美しい山並みを見ながら家路に就く日々は、東京での会社員生活と比べると、疲れ方が全く違うといえます。

農業を通じて同年代の親しい仲間もできたという関さん夫婦は「食べた人が幸せになれる農産物を作りたい」と語ります。人の笑顔が集まる場所という思いで名付けた『信州中野つどい農園』では、手塩にかけたぶどうが収穫のときを迎えています。



関さん夫婦を「里親農家」として受け入れた  
阿部繁美さん(竹原)

関さん夫婦を受け入れるに当たり、行政、JA、地域の皆さんの連携がうまくいったと思います。これは、二人の人柄が周囲に安心感を与え、応援したくなる存在だったからでしょう。新しい発想で地域に刺激を与えてくれればと思います。



なんだ屋有限責任事業組合の代表  
神田正一さん(上今井)

地元の人たちにとって何でもないようなことが、内山さんのように都会から来た人にとっては十分に魅力的だったりします。内山さんの発見が、地域の人が地元で自信を持つきっかけになればいいなと期待しています。